

肥山筑水：雑録

著者	溪川生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	57
ページ	38-49
発行年	1897-06-13
その他の言語のタイトル	肥山筑水：雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4837

肥 山 筑 水

溪 川 生

三十八

ヘスボールの對戦を見んきて、四月一日發足して、三日福岡に抵り、五日、引き返ち、宰府を経て、英彦山に上り、南下して筑後川を渡り、西肥の多良山を望む。日を費すこま十一日、道を歩む、こま一百里、龍南に眠る。肥山筑水ハ只其道中記なり。

四月一日、同人竹巔と共に龍南を出づ。前途漠々たる雲烟は、蓋し我囊中の物たらんず。菊池神社に回はりて、山鹿に出でんの企てなりしが、溪川例の如く遅刻したるを以て、古城の櫻花も拜する事を得ず、直行して山鹿に向ふ。植木に至りて雨となり、向原を過ぎ、川を渡りて、江楠を訪ふ。

尋ね來て友かりくれば春雨のふるの山への山櫻花。

雪中にあらぬ雨中詞友を訪へば、雨濛々、花片々、詩人狂せんとす、只筆の不如意を恨むるのみ。酒中江楠に示せば、例の如く眼鏡をせりあげて笑ひながら。

春雨のふり誘ふとも山櫻など訪ふ友を待ちつけはせぬ。

床に入りて、切りに八女溪の絶景を説くに、江楠色動き、此歳を取りて一度も行かぬは、耻辱此上なし是非明旦は行くべしといへば、已も圖に乗りて、奇絶快絶は尋常なり、壯絶勇絶、絶の又絶、豊の耶馬溪は蓋し其弟たり、妹たらんか、抑第一、歴史の聯想があるなり、昔仲哀天皇、と滔々説き去らんとしたるに、返辞なければ、足を腹にあぐるに、後れたりや、江楠は業に已に其溪山を夢みつゝあるなりけり。』
 二日、雨降れと矢部溪に向ふ、谷川を遡りて、大淵に出づ、固より山道なれば、うねくとして同じ川を三十三度渡る。おのれ少しく後れて、大淵に出づる一里計りにして、やうく二人に追ひ付きたるに、竹巔喜色满面、たゞならぬ様子なれば、何事かと尋ねたれど、君には毒なり、とばかりにて笑ふ。餅があるのか、菓子があるのか、と少しく怨じて問へば、何に、別に、只郵便脚夫に草鞋を呉れたるなり、

といふ。人を愚にするにも程こそあれ、草鞋を呉れたのが毒になるのかと腹立たまゝ罵れど、おのれには見向きもせで、十三計りならずや、といふに、江楠は、さも得意がに、又例の眼鏡をせりあげて、十五なり、十五なり、といふ。何が得意か、にくくしき限りなしや。

大淵に出でたるは、午後一時ばかりなり、晝食などすまして、川に沿うて遡ること二里。

處の人は、日向神といへるが、先づ年、北白川宮の下國まししくし時、いたく幽邃にして、大古の趣あることめでさせ給ひて、上代、こゝに入女津姫といへるがありて、仲哀天皇の御軍を導きまをして、九國を討ち平げたる古事によりて、新に入女津姫溪と命名し給ひき、とぞ聞えし。折りしも雨はいよいよ降り出で、川は瀧津瀨の如く、其音萬馬の騒ぐに似たり。

傘をたよりに辿り行けば、磊落たる大石は、縦横に蹲り、轟々たる巨岩は、高く天際に聳ゆ、山風時に吹けば、雨白雲と共に來り、鳥鳴かざるにあらねど、其聲怪まうして、獸に似たり、景色森嚴にして、人間の世にあらざるが如し。されど、和光同塵、春は此處にも來て、櫻花こゝかしこに咲き亂れたる、人に譬ふれば、軍將月營に杯を引いて、行鷹を送くるの心に似たり、男子と生れたらんものは、かやうの心をこそ願はしけれ、去年も此頃、しかも同じ雨中に尋ね來て、

山川の岩瀨淀みて大淵の渦まく上にちる櫻かな、

と、かたへの石に書いつけたるが、

今年また雨に尋ねて山川の水音高く歌うたふなり、

など、獨り得顔に言ひつゝくれど、江楠甚喜ばずして、いたく規模の小なるを嘆き、竹嶺も亦答えず。されば、おのれも興が醒めて、何故に悪いか、徒に幅員の大なるを以て、直に規模の雄大を云ふべから

ず、一顆の桃實に彫するにも、尙雄大の規模はあるなり、要は只、其意匠と、其刀痕とにあるのみ、我は、只長大息して神女八女津姫の爲に悲む、嗚呼二千年此景を知るものは、獨りおのれが、など、切り鼻うごめかして云ひたるに、わかしや、大淵にかへりて、日向神といふは、本道を左に、川を渡りて、一里許入れる處と聞くに、面白なき限りなく、地を掘りても入りたき思、げに、昔の某の法師が、清水寺の話にも似通ひて、大言の彫刻論、今更後悔千萬なり。この夜江楠は別れて此處に宿れど、黒木に宿る。

あすは、ヘースポール對戦の日なれば、二番列車までには、五里を急ぎて、羽犬塚に出でずば、午下一時の三番を待たざるべからず、而して對戦は其一時より始まりぬべきを、若し一刻を誤らば、曠職の罪は如何にしてか免るべきと、かたみに戒めて啣杯の數をも定めて、一瓶子と限りたれど、薰香一たび腸に入りて、口鼓止めがたきに至りつれば、終に盃中の人となり畢んぬ、竹嶺は本、飲を解せざるに、雨中十里の山道を夜にかけて辿りたる苦しさに、せめてはとて、煎じ薬をも飲むらんやうに、一氣息にする、なか／＼にあはれなり。

三日、早しといふにあらねど、雀と共に起き出づ、雀の轉り高ければ晴れぬべし、とて竹嶺は切りに喜ぶ、誰から聞いたる卜かは知らねど、宛てにならず、八時と聞いて、驚きかへりて立ち出づるに、尙雨は濛々たり。

とてもむつかし、福嶋よりは人力と考へ、道の悪さも覺えず、只ひた走りに走る、竹嶺は、昨日より足の豆に困じ果てたるに、引きながら辿る、泪も出でぬべう思へど、けふばかりは、朋友の義理もなま、大義親を滅すとは、今の事なり、免せ／＼といひて急ぐ。後にて思へば、餘りの事なり、寢忘れしは、互の罪なりしを、と云へば、左様にいはれては痛み入る、まかし、生れて三苦の一なるべし、といふ、其二

つは、と問へば、そはまだ知らぬなりといふ、今まで知らざりし苦しきなるべし。

福島よりは、車中の人となり、羽犬塚に至りて、瀛車に乗り、天拜山を左に、山郭水村を夢の如く走り、午後一時ばかりに福岡市橋口町萬歳館に着く。諸友は已に在りて、腕をさすりて大氣焔。雨止まずして試合は明日となれり。

こよひ、大西兄に招かれて、酔中例のをもつ。

手束弓握る夷もことのねに心ひかる、夜半にやあるらん

大西兄の少女、年僅に十一、善く琴を弾ず、竹嶺も、たのれも、由來木強の徒、竹嶺は、切りに齒ぎまりをなす。

四日、けふが對戦かと思へば、心も浮きくして、飯が食へぬと笑はるれど、詮なし、けふの一日は、誰も彼も同じ心なり。今夜福岡の諸友に祝勝の筵に招かれて、

博多の津袖の湊のあらいとにくたけて歸る沖つ白浪

高歌長吟、燈夜と共に更けて、羈亭に飯れば將に三更ならんとす。

この日、竹嶺囊中を探りて、行先覺束なしといふ、おのれのも底が見ゆれど、互に融通すれば行かれざるべきにもあらじ、是から先きが、一段なれば、と強いて止むれど、來月が思はると云ひて飯る、残念此上なけれど、詮なし。

五日、二番瀛車にて福岡を出でし、二日市に下る、風出で、空曇る、心細さ限りなき、小高き櫓の岡を越ゆれば、小川を一つ隔て、山に見つけて、古さびたる枕剝見ゆ、問へば、觀音寺なりといふ、櫻咲き亂れたも。坊守の僧は、六十ばかりなるべし、縁起など委しく物語る、本尊は、坐像の聖觀世音にて、丈

六あり、天智天皇の御勸請とぞ、其外立像の木像數多あり、尊し。寺のはいりに、石碑あり、此寺の記文なり、曰く、

清水記 筑前國御笠郡觀世音寺は、清水山普門院、といひける、源氏物語、玉葛卷にも、大貳のみたちのおへの、清水寺の觀世音寺に、と紫式部もかけり、此寺を清水の御寺といふなり、さいふことも、此寺のうしろに、清水のわきいつるところあればなるべし、この水、今にいたりてかはらず、しかいへども、猶とし月をかさねて、後の世にもいたりなば、この名をさへたどらん、とある人いたみねもひて、此事をしるして、するの世にもつたへよ、とこふ、予も權帥をかねし身なれば、餘執にひかれて、いなむことをわすれ、もとめにしたかひ、筆をとりてしるすことまかり。

安永五年九月十八日

權大納言兼大宰權帥藤園

印篆は公廉とあり。又梵鐘あり、百濟より齎したるものといふ。僧はいと懇に庫裡に招して、寶藏よりくさぐさのもの、とり出せて見す、中に小野東風が書蹟なりといふ觀世音寺、と記せる扁額あり、三尺ばかりなり。

十町ばかり後に戻りて、都府樓の址あり、げに都府樓は名のみなり、只礎のみ田徑に横れり、御影石にて、直徑二尺許ばかり、圓形なり。渡邊清氏、縣知にありし時、一基の碑を建てたるが、

大宰府之名、始干推古、至天智曰都督府、聖武朝曰鎮西府、清和朝曰外朝(中略)壽永中、安徳帝西狩駐蹕、當時尙存舊制云、(中略)賴朝爲天野遠景鎮西奉行、建久中、武藤資頼任大宰少貳、子孫襲職、府制又大變、足利之衰、府廳終廢、(下略)

以て其沿革を知り得べし。

時に、午下三時、朝より一粒を食はず、感慨殊に深し、私かに思ふ、かの世の厭世といふは、多くは此心なり。不如意貧乏にして用ゐられず、而して青眼世を容るゝものは、蓋し第一流の傑物なり。

大宰府に行き、餛飩を食ひ、さて天満宮に詣づ、莊嚴極まれり、先づ神前に額つきて、父母の恙さをこひのみ申え、社殿に至りて、御札を戴く、記念なればとて、御殿の寫真なんど買ふ。梅が枝餅といふは、名物なれば、是も。

こゝには、かねて拜山、浩潮の二書家ありと聞けば訪ひて書を乞ふ、拜山翁は年七十ばかり、童顔鶴髮なり、浩潮翁は京師に出でゝあらず。

日もやう／＼傾けば、行かんと去たるに、龍門神社は神母玉依姫尊を祭れる所にきて、こたび官幣社に御昇格あらせられて、新築城中なり、と人のいふに、まかればとて、一里ばかり山手に入る。龍門山の麓なる小さき村中の小山にあり、今まではいたく廢れたるなんめり、宮居も細し、此大御代の難有さ、今更のやうに思はる。

五里ばかり行きて、甘木町に至る、日は己に暮れたり、泊らんとは思へど、大に心かゝりのものあなれば、一里許り行きて、十文字といふ村に宿る。中夜より雨となりて寝られず。

六日、晴れず、是なれば、登山しても眺望はなし、引き返きて吉井に出でんか、と思へど、こゝが男子の意氣地、登るだけにてもと、杖をたよりに行く。語らふに友もなく、尋ぬるに家もなく、遮へ、雨雲道を瓊きて、溪流袂を洗ふ、山を回ぐりて、時に聞ゆる犬の聲、牛の聲、今はなかく／＼になづかしや。水殿に笛の音やみてはどゞぎす。

下弦の月沈まんとしてあるじ人膽を練る。

行みて歌書かんとすれば白雲我を追ふ。

雨を聞て竹嶺我を思ふらん。

なんど、考ふ、毎も道に疲れたる時はかくするなり。鹽井川といふに至る、三軒ばかりの村なり、彦山村までは一里の登りなり。雨は止みたれど、未だ晴れず、英彦山は何處か知れず。午後五時すぎ、やうやう彦山村につく、來し跡は只白雲なり。四五十戸ばかり、山坂なり。英彦山の頂上までは四十二丁なり、遅ければ登らず。某院某坊など、嚴めしき名は打てど、店屋もあれば、宿屋もあるが、大方は明屋敷なり、衰頹の体たらく、酸鼻の極みなり、昔は、九州の大諸侯を味方につけて、素破と云へば、一千の僧坊は、悉く陣營となりて、武威六十餘州に廣がり、殆んど京の叡山を凌ぎたるに、世變と共に没落して、今は實に此の如し。

さて、何處に泊らんかと、打ち見れば、看板に宿料のある筈もなく、途方に暮れて佇めば、横の店より切りに勧めらるゝに、見れば、瓦葺の二階屋にて、上宿のやうなり、是はと思へど、呼ばれて今更行き過ぐるも、卑怯らまければ、入る、店女二人も出で、足湯を運び、草鞋など丁寧にはたく、氣の毒し。歴史の調べもあり、余田先生の言傳へもあれば、かねて高千穂家を訪ふべき志なりければ、家居など問ふに、あるじは愈々平身して、先づ先づといひて、一號室に案内す、自ら怪まるゝまでなり。

菓子など出で、火鉢など運ぶ、毎もなれば、餘類なからしむるに、食ふ心もせず、只管に案じらるゝ、須臾して膳も出づ、洋燈の影に見れば、七菜をつけ、山の上の片田舎なるに、悉く魚けばかり、鯨の洗身などもあり、是は生れての珍物なり。昨夜の十文字すら、二十一錢なり、床の間の宿料に、三十五錢の下のないのに、不平はないが、早や我運命は極まりたるなり。この時我囊中は其三十五錢にも足ら

ざるも、實に十有五錢。

竹嶺が居れば、奇策も出づべきにと、思ふも、膝との相談なり。

先年、矢部川に遊んで、同じく此厄に遇ひたる事ありたるが、けふも亦其策によらんと、小學の先生を訪ふに、雨あがりの山道なれば、言語に絶えたり。やう／＼に尋ね當りたれども、不在なり。まかれれば、駐在所と志し、引き返せば、是も福岡に出でたり。夜はいよ／＼闇くなりぬ、村役場は、と問へば、二里許りの麓なりといふ。

高千穂男爵にても在さば、と思へど詮なし、進谷れり、さりどて、宿屋の素町人に明かすは、耻辱の上の耻辱なり、待て待て、男子の度胸は、此の如き時にこそ見ゆれ、とても足らぬものなれば、煙草のため。尋ね回はりてサンライスを買ふ。宿に飯りて、吹きながら思ふに、四日許りならば、手紙の往復もありぬべけれど、かやうの田舎に、高値の旅籠を出すは、謀の得たるものにあらず、さりどて妙案も出でず、幾度か膝を立て直せど煙を吹くばかりなり。

この時、不圖心に、學校の先生は果して獨りなりや、といふ疑の浮びたれば、宿のものに尋ぬるに、否、二人にて、磐村といひ、年の頃も貴方に似たり、といふ、嬉しさ堪えがたく、訪へば、げに増しても一つか、二つはかりなる快活らしき人なり。名刺を出して、こたび獨り登山したれど、尋ぬる人は居らず、地理や、沿革の調べも出來ず、ほど／＼困うじ果てたれば、といふに、いと懇に、そは、嘸かしの事なるべし、されど、夕餐前にて待たせまつるも、ほいなければ、御宿にて伺ひまつることに、といへばそは辱なきに、といひて飯る。

磐村氏名は良人といひて、濟々囊にも遊び、成城學校にもありたるが、腦を病んで久しく出でずとい

ふ。京にある日、無錢旅行を企て三錢を持って、東海道を往復し、七十日の間、祭文讀みとなり、果ては盜難に遇うて、肌着一貫になりたるなど、隔てもなく、火鉢を圍んで大話しとなりたれば、たのれが一條も都合よく承諾して、明且早う使をねこすべし、あまり宿をば出でぬがよし、などいふ、氏が經驗より來れぬなるべし。

七日、けふは八里ばかりなり、登山もすべければ、早う起き出で、七時には脚絆もつけたり、されど、使は來ず、八時にもなり、九時にもならんずるを、如何に玄つらん、と心元なく、待ちかねて行きたるに、氏は未だ寝ねたり、たのれの來たるを聞きて、大に笑うて、よべの承諾を果たす、嬉しといふも言の外なり。

山の三峰より成りて、北より登る、麓に新津社といふがあり、其峰に登れば、豊前一圓と筑前の半は、足下に見ゆ、風いみじう吹きて、岩の根、木の根をたよりに行く、始めは瀧の落つるかと思へり。中の岳にかゝれば、樹木鬱鬱として露氣冷かに、風も聞えず、鳥聲も折々なり、山氣人を聳ふといふは、げに靈異の心を添ふるものなり。御手洗水あり、口など漱ぎ、心を清めて禪登る。御社は西向きなり、廣前に伏して祈願す。宮守は年七十ばかり、御札もあり。きのふ雪降りといふ、されど、麓の方は春霞にて、定かには見えず、臆氣なれど、故里の山はなつかしうして、あの底にかと思へは、なつかしうも、嬉しうも覺えて、涙も出でぬべう。

又鹽井川に出で、鼓といふ村を経て、筑後川を渡る、日は暮れたり、こよひ、國武兄の家に宿る。こよひとなれば、よべの事も笑話となりて、飲みあかす。

彦山縁起によるに、彦山は日子山の意にて、天忍穗尊此山に鎮座ましましたるゆゑにて、英の字を冠

するは、靈元帝の御代よりなり、善泰の年、僧善正といへるもの、大宰府に來り、佛法を唱へ、終に此山に入り、日田郡藤山村なる國司(？)藤原恒雄といへるに信仰せられて、靈仙寺を開基す、則一山の主にして、今の高千穂家は其後なりといふ。此山の興亡は、蓋し九州の消長に關するもの多きを思へば、他日の研究の爲に備忘となす。

八日、午後二時頃、國武兄に別れて久留米に出づ、雨ふる、俣野兄を訪ふ。扁額に眞木和泉守の丹冊あり、

なにはの海思ひふかめて漕く舟は身をつくしこそ限りなりけれ

筆蹟もいみじう清らなり。げに男子一たび志したる上は、身を盡しこそ限りなれ、今の世、輕薄にして至誠事に處するものなし、成ると成らぬとは、天にもあらず、時にもあらず、物にもよらず、只人にあるなり。

九日、俣野兄に別れて佐賀に向ふ、瀛車旅行丈け愚なるものはなし、向ふに腰掛けたる田舎男の、居睡りする、むべなる事なり。佐留志まで所用あれば、牛津に下れて、午後二時頃佐賀に引き返す、柳川までは、三里ばかりなれば、と思ひしに、尋ぬれば五里ばかりといふ、かゝる事と知りせば、錢を出して、あの瀛車には乗らざらまを、と悔ゆれと詮なし、囊中は只十錢ばかりなり。剩へ、さのふより耳痛ければ、廻端丁と聞いて、病院を尋ぬ。十日の山野を經たれば、草鞋掛けも切れくにて痛めば、半を割いて杉下駄を買ふ。下駄屋を出で、十間許り來るに、嚴めしき洋服の人、二人連れなるに行き違ひたり、一人は必ず見し人なれど、思ひ出さず、まばし後影を見送るに、五年以前、郷の中學に教鞭を執られたる、藤嶋先生に相違はあらじと、鬚髯は逞しけれと、歩き振りに寸分の違ひなれば、聲を掛くる

に、先生も振りかへりて、たのれが名を呼んで、能く似たりとは、思ひしが、どのたまふ。今より病院に行きて、柳川に出づる積りなりといへば、五里ばかりもあるべきを、こゝに泊らば、とて細やかに教へ給ふ。

病院を出づれば、日も落ちかゝれり、友がりなればとて、柳川に行かば夜になりぬべき、寧辻堂の露營と、一旦は定めたれど、さりとて初めての道なれば、思ふほどの勇氣も出でず。終に引き返して、八番小路を尋ぬ。先生もいみじう喜ばせ給ひて、何くれとなく、もてなさせ給ふ、嬉々さ限りなし、夜も更くるまで、昔語りす。

けさ、侯野兄と共に、圓通院なる高山伸繩先生の墓に詣つ、このごろ玉垣雨に壞れたるに、明善校の學生、相謀りて修覆す、けふも三四人ばかり來て、石など運び居たり。嗚呼世は學て罪惡の世とならんずるを、九州の北、南筑に此青年あり、以て意を強ふするに足るべきか。

九日、八時頃先生に辭して立ち出づ、若津の渡までは、一里ばかりと聞きつるに、なか／＼遠し、尋ぬる人もなし。折しも若き商人体の男、後よりくるに、柳川までは、と問へば、二里半なりといふ、愕々さ限りなし、五里といふ道を、未だ一里も來ぬに、さまでの事はあらじと、と云へば、まばし打ち傾ふきて、然り五里計りもあるべし、といふ。荷物もなく、藤裏草鞋にて、相形もたゞならず。金は待たねど、外套とかばんとは、人のものなり、若しもの事ありては、一分立たず、かゝるものに連れ立ちては、と思へど、合は色々話しかけられて、何處に泊るべきや、など問ふ、高瀬あたりなるべし、と云へば、たのれも其あたりまでなり、とて、扱て、明日は二番なるべし、と伴申すべしなどいふ。渡にてこそ、と思へど、思ふやうにもならず、終に若津町に入る。たのれ、少し所用ありて、警察署を巡るものなれば、こゝ

は何處にや、と尋ぬるに、行手をさして、あのあたりなり、といふ。こは郵便局ならずや、といへば、この横町なり、といふ、腹立しけれど、禮をいひて入る、警察に入りても、固より用あるべきにあらねど、柳川の道など、長々しう尋ね、行き過ぎたるゆり、とは思へど、尙古物屋に入りて、書物など見。かれこれ一時ばかりも立ちぬれば、とて、本道に出で、二里はかりにて柳川に入り、森兄を訪ふ、森兄の殿父梅雪翁が詩書の名を聞くこと久し、一詩を乞ふ。

感時觸物不温良 英氣勃然抑亦揚 四十余年夢初覺 行雲流水是吾郷

乙よひ、森兄と共に岡兄を訪ふ、飯途舞鶴の古城に至る、否、城とは名のみなり、石垣は碎かれ、樹木は焼かれ、滿目秋の如し、おのれ、東西南北して、城址を吊ひし事も少からねど、今夜ばかり恨めしさはなし。

青柳の糸ならなくは行く水の下の心は引きとめつらん。

十日、朝千手兄を訪ふ、午後二時森兄、岡兄と共に、瀨高に至りて、瀛車に乗る。池田に着けば、花影已に去りて、竜南の春色將に老ひんとす、只蘇山の煙、雲の如く靜に天の一方を抹するのみ。

文苑

和文

月夜聽琵琶

花もちり、藤の、ねばつ、かなさ、ま、したる、も、時、すぎ、て、若葉の、梢、涼、ま、げに、繁、り、行、き、杜、

ふえの、舎、す、さ、び